
3. 研究会「都市創造戦略研究会」

市民手づくりの商店街活性化事業

- 「元気市 in 海南」について -

和歌山大学経済学部

教授 大泉英次

(1) はじめに

JR 海南駅前の商店街は、かつての商店街再開発事業、そして海南駅舎建替え整備事業によって大きく面目を一新し、海南市内はともより周辺地域の多数の消費者を引きつけてきた。ところが現在は、集客の重要な核となってきたスーパージャスコの撤退の影響をうけて、極めて厳しい状況に直面している。

こうしたなか、商店街に賑わいを取り戻そうという市民の力で、昨年 10 月、「まちおこし」のボランティアグループ「元気市 in 海南」が発足し、そのユニークな活動が注目を集めている。私は「元気市 in 海南」事務局の宮本賢治氏にお話をうかがう機会があったので、誌面をお借りしてその活動について御紹介したい。

(2) 活性化事業の経緯

ボランティアグループ「元気市 in 海南」は、商店街の復興を通じて「まち」全体の活性化を図る、障害者・高齢者の働く場の確保をめざす、行政の援助を求めず住民自身の手で「まちづくり」をめざす、という 3 つの基本理念をもっている。昨年 10 月の発足後、11 月 4 日に海南市日方の旧ジャスコ海南店前で第 1 回の「元気市」(直産市)を開催した。当日は商店街関係者、障害者団体、農漁業関係者、サラリーマン、OL など 46 人のボランティアが参加して、直産市は予想以上の大盛況となった。

市民手づくりの活動を立ち上げるためには、さまざまな気配りや苦労があったようである。グループの代表を誰にお願いするか。代表は名前だけの「あて職」ではこまる。先頭に立って活動する「できれば女性、できれば若い人、必ず明る

い人」という条件で探したところ、その条件通りの人を代表に迎えることができた。また、商店街関係者も代表の一人に加わっていただいた。

「元気市」のために屋台 7 台をボランティアグループで製作。出店者は上記 3 つの理念に共感してくれることが条件である。これは、種々のイベントで見られる一般のフリーマーケットとの違いをはっきりさせるためであった。

「元気市」開催に向けて案内ビラ数千枚を印刷し、商店街周辺の住宅に配布した。ポスターもつくり、商店街の店舗に掲示をお願いした（最初はポスター掲示を受け入れてくれたのは 1 店だけだったそうである）。新聞の発行、「元気市」での餅つき大会開催とお餅、赤飯、炊き込み御飯、買物券の無料プレゼントなどたくさんのアイデアも出て、それを実行した。

（３）活性化事業の現況

「元気市」は毎月 2 回、開催されている。販売される商品は地元の野菜、果物、魚介類、それに障害者の手作り作品、市民の手づくり食品などである。最初は、営業の邪魔になるのではという懸念から商店街の反応は消極的だったが、「元気市」が回を重ねるにつれて訪れる市民の数も増えていき、それが商店街にも好影響を及ぼしている。

「元気市の開かれる日は、うちの店の売上が 1.5 倍に増える」「商店街全体の力になるから、がんばって続けてほしい」という声も商店主の皆さんから出てきたという。いまでは、市が開かれる場所の清掃、イベントへの参加、駐車場の提供など多くの協力が寄せられているという。開催案内のポスターを掲示してくれる商店もいまでは 40 軒にのぼるという。

宮本氏にお話をうかがった時点では、ボランティア会員は 85 人、「元気市」開催の仕事には常時 20 人から 40 人が参加するという。出店する生産者、障害者団体、そして商店街関係者の協力は大きく広がりつつある。

（４）活性化事業の今後

ボランティアグループでは、今後に向けて様々なアイデ

アが議論されている。「元気市」の定期開催を足場にして、さらに商店街そのものの活性化事業に取り組もう。市内共通商品券発行の再開を実現しよう。自治会とも協力してさらに市民参加の輪を広げよう。楽市楽座（骨董市）・あげえ（町並み保存）など市内の市民団体との横のつながり、市民運動のネットワークを広げよう。市民が参加し提案する「まちづくり」を追求しよう。これらのアイデアが今後、1つ1つ実現されていくことが期待される。

ボランティアグループのモットーは「小さく生んで、大きく育てる」「少しずつ、少しずつ」とのことである。市民の力による商店街活性化、まちづくりの活動は、そのユニークな理念とともに、これからも注目を集めるにちがいない。